

見たい聞きたい知らせ隊 Q 隊員が行く!

VOL.11

「発行」令和6(2024)年2月9日
「作成」五泉市地域おこし協力隊 邱子青
◎ 歴史写真は『蒲原神楽 復活二十周年記念誌』(平成9「1997」)年3月発行より引用しています。

村松藩主も喜ぶ舞い 二度の復活、今の時代へ 蒲原神楽 《歴史編》



昭和23(1948)年頃の蒲原神楽

かんばら かぐら
熱演に藩主様が大喜び!
家紋の使用許可書を受託

悪疫退散のため、 旅芸人が動いた!

蒲原神楽の起源は天明二(1782)年頃でした。悪疫が流行した当時の蒲原部落に西蒲原の旅芸人(神楽師の説も)の源左衛門がやってきて、鹿右衛門の家に泊まりました。鹿右衛門より悪疫の状況を聞いて、源左衛門は寝食も忘れて獅子頭と天狗のお面を彫り上げ、そのお面をもって神明宮で悪疫退散・家内安全を祈って、神楽を舞ったところ、悪疫がたちまち退散したといえます。その後、源左衛門より教えを受けた村人たちが、村の祭事や難事にはこの神楽を舞うようになり、伝承されてきました。鹿右衛門の家でお面を彫ったことから、「鹿右衛門神楽」とも呼ばれていました。

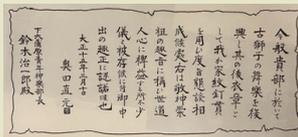
平成9(1997)年の蒲原神楽



獅子舞の幕には村松藩家紋「釘貫紋」が使用されています。



村松藩家紋「釘貫紋」の使用許可書



「地域の伝統をもっと大切にしよう」の思いで復活公演をやり遂げて以来、縁起が良いということで、結婚式や竣工式などで呼ばれるようになり、昭和57(1982)年新潟駅の新幹線開通祝いなどにも出演しました。

蒲原神楽の逸話にこんなものがあります。五泉市村松地域にあった村松藩の第九代目藩主堀直央(在位1819~1857)の時に、神楽の若者たちが城に招かれ、藩主の前で演じたことがありました。あまりの熱演で天狗の禪がほじたのも忘れて神楽を舞ったところ、藩主は落ち度をとがめず大変歓迎し、自分の羽織を脱いで「返すに及ばず」と与え、窮地を救いました。さらに堀家の家紋「釘貫紋(くぎぬきもん)」入りのアオ三反(布生地三反)を賜ったといえます。その「三反」というのは、神楽太鼓の音が「さんだん、さんだん」と威勢よく聞こえたことに由来するといわれています。



昭和53年4月1日新潟日報、復活公演の記事

蒲原神楽の様子《奉納編》は前の号(VOL.10)をご覧ください!

大正と昭和、二度の復活! 地域の伝統をもっと大切にしよう

蒲原神楽保存会「松久会(しょうきゅうかい)」は大正15(1926)年に神楽の使命を説いた弘宜栄三さんに促されたことにより結成されました。結成当時、蒲原神楽は衰退期にありましたが、松久会結成後は大正期から昭和中期にかけて隆盛を極めました。その後、昭和40年代の経済の変動により蒲原神楽は再度衰退期を迎えましたが、昭和53(1978)年に先代会員の指導のもと、鈴木幸男会長を中心とした松久会のメンバーが猛練習を重ね、復活公演をやり遂げました。現在の岩野和範会長もその際の演者の一人でした。

「世に出せる」の思いで 指定民俗文化財(民芸) 第1号

蒲原神楽は平成2(1990)年、当時の村松町より民俗文化財(民芸)の第1号となる指定を受けました。この時のことを先代の鈴木幸男会長は『蒲原神楽 復活二十周年記念誌』で次のように振り返っています。

(昭和53年の復活公演を経て)

この時に「蒲原神楽」は生きかえった。世に出せるぞ。と思う気持ちと、この人数でいつまで続けていけるかという思いが交差しました。しかし、幸いにもこの頃に農協芸能祭、新幹線開通等数多く出演する機会がありました。また、途中で数人の会員の出入りはありましたが、若い人も加わり充足当時の心配はいつの間になくなっていました。

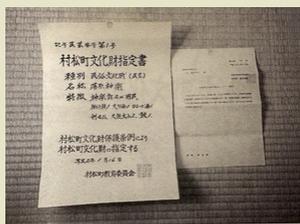
会員の皆も一生懸命にやって来ましたので、念願であった伊勢神宮参拝と、神楽の奉納を十年の節目として実現する事が出来ました。この経験が自信となり、誇りを持って活動出来るようになったと思います。

十年も続けてこれたから、もう大丈夫と感じ、平成元年に町の文化財指定を申し込み、平成二年一月に町民俗文化財第一号という指定を受け、復活当時に夢見た「世に出せる」事が出来ました。

鈴木会長の「世に出せるぞ。と思う気持ちと、この人数でいつまで続けていけるかという思いが交差しました。」という言葉からは、継続と継承に関する葛藤や不安が感じられます。平成18(2006)年の五泉市・村松町合併後も、無形民俗文化財としての指定は続いており、新年の初舞いは現在に至るまで行われています。



民俗文化財の指定書と記念公演



ラポルテ五泉の多目的ホールのステージでの蒲原神楽

2024ラポルテ五泉 新春まつりに蒲原神楽

新型コロナウイルスの影響でなかなか公演を行うことができませんでしたが、令和6(2024)年はラポルテ五泉の新春まつりにトップバッターで登場しました。短めの10分間の公演でしたが、人々を惹きつける舞でした。

編集後記

邱が五泉市地域おこし協力隊に就任した時から、市内の民俗文化能の「蒲原神楽」に興味を持っていました。当初は、果たして地域コミュニティの中の神楽を取材することが出来るのかと心配していましたが、松久会の皆さんは、取材を快諾してくれました。前準備として資料を調べると、幾多の曲折を経て、現在に伝わっていることが分かり、取材当日の神楽舞を感謝の気持ちで見ることができました。

なにより取材させて頂いた岩野会長をはじめ、蒲原神楽保存会「松久会」の皆さんに感謝いたします。蒲原神楽のいきいきとしたかわいらしい獅子舞、熱練の歌とお囃子、とても魅力のある神楽です。これからも継承して欲しいと願うばかりで、こちらの記事で少しでも多くの人に蒲原神楽の魅力を分かっていただければ幸いです。